

第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第68回全国高等学校演劇大会

生徒講評委員長

(東京都) 東京都立小石川中等教育学校

鬼頭 すみれ

コロナ禍をきっかけに、人間と人間の間の距離から、人との関わり方、生き方をこれまで以上に見つめ、感じさせる作品が多く登場しました。その一つ一つに私たちは胸を打たれました。演劇には未来を切り拓く力があると、再認識させられました。

上演1 東京都立千早高等学校

高校生の会話の中から、家庭環境によって抑圧されている現実が浮かび上がってきました。みんな何かを抱えており、真正面からそういった誰かの問題を受け止めていられるだろうか、希薄になりつつある人間関係について考えさせられた作品でした。

上演2 埼玉県立秩父農工科学高等学校

就職や進路のことで悩みもめる彼らの姿に、どうすればブリアント＝「輝かしい」人生を送ることができるのか考えさせられました。最適解は自分の手で選び取るべきだと思わされた作品でした。

上演3 北海道大麻高校

コロナウイルスを引き金として起きてしまった葛藤や衝突が、私たちそれぞれの体験と重なり強く胸を打たれ、多くの講評委員が涙した作品でした。ラストの Tip-Off のシルエットのように、私たちも前を向いて生きていきたいと思えました。

上演4 大谷高等学校

守ってくれる存在が、妄想にしかない鹿毛野の「消えないで」というセリフは身につまされました。そばにいてくれる人や味方になってくれる人は、たとえ家族ではなくても、想像上であっても、周りにたくさんいるということを教えてくれた作品でした。

上演5 兵庫県立伊丹高等学校

卒業式のハレの日に、巻き起こる人間模様を描いた作品でした。ともだちの定義は千差万別である。価値観の違う愛と夏樹と一が距離を縮めていく様が、天気の変化を通して描かれていくことに、心が温まりました。

上演6 大分県立三重総合高等学校

私たちは今ある制度に安住しているのではないかと考えさせられました。現実を嘆くだけでなく、宗教、歴史、政治、哲学などの要素が存分に織り込まれ、固定観念に捕らわれずに考えて行動したいと強く思った作品でした。

上演7 岐阜県立岐阜農林高等学校

コロナ禍で大会を絶たれた自分たちとマクワウリを重ねることで、伝統を受け継ぐことの本質を考えさせられた。「切れる」、「紡がれる」など、糸を思わせる表現が多用され、過去と未来、そして、ゆうなとまゆが繋がって一本の糸になったようでした。

上演8 愛媛県立松山東高等学校

演劇の大会のリハーサルで起こる 1 時間の物語でした。空間を巧みに使った舞台に、観客の心を笑いと涙で揺さぶって

劇中劇を表現する演技力の高さ

作品でした。演劇を知らないみななどがラストには声を出して手を振る姿に、演劇の力を改めて感じさせられました。

上演9 栃木県立栃木高等学校

男子校特有のバカバカしさや純粋な恋心、生物部の仲間のあたたかさに爽やかさを感じた作品でした。亡くなった人たちも私たちの思い出の中で生き続けるということが、ラストの月の光や雪などの表現を通して描かれ、モリヤが前向きに生きていけるのではないかと予感させられました。

上演10 青森県立青森中央高等学校

いじめに対抗するためにミサイルを落とすという発想はまさに戦争であり、あと八分でミサイルが着弾するという状況下で必死に幸せを得ようとするガクトにこの瞬間を大事にしなければと思わされた。演技力の高さや演出方法に講評委員達は驚かされました。

上演11 島根県立三刀屋高等学校

家族を愛し、患者を愛し、人を愛した医者・永井隆さんの物語に、講評委員一同大号泣しました。無知であることの罪を感じたことで、私たち一人ひとりが戦争を他人事とせず、平和の大切さを後世に伝えていかなければならないと思わされました。

上演12 茨城県立日立第一高等学校

ランキングによってクラス内での順位が決まってしまう高校生たちの悩みを通して、魅力とは何かを考えさせられました。順位が可視化されても、一番大事なことは自分の『好き』を誇りに思うことだと気付かされた作品でした。